

令和2年度第2回コアメンバー会議 議事録概要

日時：令和2年8月31日（月）19：00～20：30

場所：西条市役所新館4階404会議室

■出席者：

別紙「出席者名簿」のとおり

■会議次第

1. 他地域のコミュニティ財団の設立趣旨書について率直に思ったこと
2. なぜ、その地域では、コミュニティ財団を設立したのだろう
3. この3つの財団を、もっと、イメージしよう
4. コミュニティ財団の設立を検討するうえで、どのような判断基準や議論が必要か

■第2回コアメンバー会議の目的とゴール

目的：3つのコミュニティ財団（雲南市・岡山県・佐賀県）の設立趣旨書から、財団とは何かをメンバーごとに理解すること。

ゴール：コミュニティ財団が「何をやる場所なのか？」を整理・理解し、西条市における必要性に係る「判断基準」を導き出すこと。

■議事概要

1. 他地域のコミュニティ財団の設立趣旨書について率直に思ったこと

（メンバーからの意見）

- ・3つの設立趣意書は、目的がしっかりしており、やりたいこと・あるべき姿が共有されている。
- ・目的達成に向けた手段として、コミュニティ財団が具体的にどのような役割を担うのかが明確に述べられている。
- ・設立趣旨書は、「自分たちがこうしたい」というベースが文章化されている。文章化することで自分たちの活動の「柱」となっていると考えられる。
- ・「公」、「共」、「私」という区分において、「共」の部分においていかに人の流れやお金の流れを作っていくのかという問題意識を持っている地域が全国各地にあることを認識できた。
- ・チャレンジしていくということは凄く価値があることだと思う。
- ・コミュニティ財団は西条市に本当に必要なのかなと感じている。現状でお金も人も少なく

て大変なのに、「また新たなものを作って人を割くの？」という懸念点がある。

- ・社会的な課題をどう解決したらいいとか、自分たちの住んでいる地域のことは自分たちが中心となって解決したいということが伝わってきた。

- ・今の社会背景や未来をまずは地域住民が知らないといけないと考える。

- ・西条市では、地域コミュニティ事業も行っている。「地域のことは自分たちで」という方向性はローカルファンドの構想と同じだと考える。既に行政で実施している事業等との整理が必要。また、小さな範囲からやって行かないとイメージが湧きにくい印象。

2. なぜ、その地域では、コミュニティ財団を設立したのだろう

～意見交換～（事務局と記載している以外はメンバーの意見）

- ・現状への不満や、行政や政治を批判して立ち上がっているように見える。私が所属している団体も行政や政府に意見を伝えることを目的に立ち上がった。

- ・設立趣旨書はその地域の方が地域の実情に応じて作ったものだから、ここにいるメンバーでは読み取りにくい。

- ・どの設立趣旨書にも共通して言えるが、今のシステムが自分たちの課題を解決するのにどれも当てはまらないから、公益的に解決する手段として財団を設立したのではないか。

3. この3つの財団を、もっと、イメージしよう（財団のいいところ・悪いところ）

（資料配布）

～意見交換～（事務局と記載している以外はメンバーの意見）

- ・いいところは、例えば何かの助成金を受ける時に大きな財団に申請した場合、認可するのは、ここに住んでいない人であるが、地域の財団の場合、ここに住んでいる人が公共性のお墨付きをくれることになること。

- ・財団に関わる人というマンパワーが必要なことは、ハードル。現状でも忙しいところ、財団のことが加わるとしたら難しい。ただ自治会費を集める延長上にあるものだと考えるといいのかなと思う。

- ・一番慎重になるべきところは、お金が集まるという点。

お金を扱う際の透明性や信用は重要。お金の管理・監督を誰がするのか。会社を経営している人が関わると疑いの目を向けられることもあると思う。

- ・いいところは、NPOや市民団体が助成金をもらって事業を行うと、市民は、自分が出したお金ではないためあまり関心が持てないが、財団を通じて自分が出したお金が使われると、その団体の活動に市民が注目すること。結果的に団体の活動の質が上がると思われる。
- ・デメリットとしては、財団法人という法人格を取るためには300万円が必要であること。300万円集めることができるのであれば、財団を設立せずにそのまま事業費として出してもいいと思う。
- ・神戸のNPOがやっている基金では、年間寄附額が約350万円。だとすると専従スタッフを雇うことは不可能。お金を預かるのは職業として責任をもってやることなので、ボランティアでは運営はできない。経営的なところがハードル。

◎事務局

どの財団でも経営面は苦勞されていると聞くと、実施する中で考え、工夫されている。会費、委託事業、手数料などで人件費を賄われている。

- ・いいところは、小さな団体に注目が集まり、資金の提供が可能になること。
- ・懸念する点は、本当にお金が集まるのかということ。私に関わる活動では、80万円を20人ほどで集めている。財団では、設立時に300万円が必要で、スタッフを1人雇うためには、毎年人件費として別に300万円が必要。そこからさらに、団体へ渡すお金が必要だとすると、満足されるものとなるのか。
- ・それだったら、300万円を集めることができる方法を「教える」とか、現行の組織でできることをやっていくのがいいのではないかなと思う。

・事業として考えると難しい。寄附を集めると意見も多くなり、それに見合うだけの事業展開ができるのか等、いろいろな課題が出てくる。コミュニティ財団は、寄附を通じて何千人の方の想いをいただくので責任は重い。「西条を良くしたい」といったぼんやりとしたものでは想いに耐えがたいのでは。確かに、小さな団体に目を向けてもらえるが、寄附した方がそれを望んでいるのかどうかという問題もある。

◎事務局

財団の仕事は、団体に対してお金を出すだけではなく、団体自体の寄付集めのサポートを行うことも1つ。一時的に資金を集めるだけではなく、継続的な寄附に繋がるよう、計画段階からサポートすることも必要。

- ・悪いところは、既存の組織と活動が重複してしまうことではないだろうか。年300万円寄付が集まるのなら、財団設立に使うより、それをもとに事業をした方が早いというのも理解できる。300万円は頭金であり、実際には使えないわけであるし…

◎事務局

財団法人を目指す理由は、一般財団法人から公益財団法人になると寄附者にとって税の控除というメリットがある。寄附もしやすくなるのではないかと想定される。

◎事務局

財団は地域でお金が行き渡る中間地点になると考えている。300 万円を集めてそのまま使うと、使ってしまうと終わってしまう。財団という中間支援的な立場で、市内の団体の伴走支援をしたり、資金を渡したりする仕組みが必要だと考えている。

その仕組みの 1 つは、現在市で行っている SIB 事業。ほかにも、団体助成もある。団体助成をする時に、金融機関と連携し、助成プラス融資という方法も出てくるだろう。これらをコーディネートするのが財団かと思う。

一番のネックは、これをやろうとする人で、「これが自分のビジネスだ」という意気込みがある人がいるかどうか。

この話を市で進めている理由は、これから増えていく地域の課題の解決のため。それにはお金も必要。これまでのように行政のお金だけで賄うのは限界が来ている。一例として、松山市でタクシー事業者と連携して地域の人の足を確保しようという動きがあったが、スタートするにあたり、資金が必要となる。こういうことが財団を通してできたらいいと考える。

ただネックになることがたくさんあるので、皆さんと話していきたい。

・いいことはたくさんあると思うが、継続が難しいのではないかと。最初に 300 万円集めるのはみんなの努力で何とか用意できると思う。ただ、人件費や事務所の賃借料等もかかる。岡山の団体は一般財団法人化から 8 年くらい経つが、人口規模の違いがあるとは言え、継続できている。その理由なども教えてほしい。

4. コミュニティ財団の設立を検討するうえで、どのような判断基準や議論が必要か

(付箋に各自が思う判断材料や議論を書いて、とりのこ用紙に貼る作業)

(貼ってもらった付箋を内容ごとにグルーピング：別添写真参照)

【グルーピング内容】

- ・ 他団体の事例
- ・ 財団の体制
- ・ 関わる人のやる気・熱量
- ・ 担い手の有無
- ・ 助成金の現状
- ・ 財団以外の仕組みの検討
- ・ 既存システムの調査
- ・ 法令の確認

- ・財団の魅力、存在意義
- ・財団の財政運営
- ・地域での意識共有、市民の関わりしろ など

(グルーピング後)

～意見交換～ (事務局と記載している以外はメンバーの意見)

・代表者がいないとできないと思う。誰がするのか決まらなかったら、議論をしても時間の無駄になってしまう。

・行政でできないことをやると聞くと、小さな行政を作るみたいで、チェック等ものすごく大変だと思う。この財団は広くお金を分配しようとしているので、もらえる・もらえないですごくトラブルも出てくると思う。この辺りはどのように考えているのか。

◎事務局

お金の取扱いについては、今実施している SIB もそうだが、事業の選考や審査をする機関は別途必要。その審査を経て、助成することで信用力もできる。信用力があれば、財団だけではなく、他からの資金調達、例えば銀行の融資につなぐこともできる。

代表者については、仰る通りで、代表者を決めてからやるというのが一番早いやり方だが、今の状況の中で、それは難しい。1つの方法としては、このような仕組みを作って、やりたい人を迎え入れるという方法が取れないかと考えている。迎え入れるためにも、この会議での議論を通して、応援団を増やしていきたいと思う。

・迎え入れる状態ができて入ってきた代表者が、自分の考えや思想と違っていた場合を懸念する。例えばここにいるメンバーなら、ある程度人となりもわかっているが、思想が全く違う人に協力するのは無理である。全国探せば代表者となる人はいると思うが…

◎事務局

公募して、応募してくれた人が、財団が目指す方向性に合うのか、このメンバーでオーディションをして見極めるという方法もある。ただ、迎え入れる側として、「どういう財団にしたいか」という共通認識がないと、上手く行かないし、その人をみんなで継続して支えていく必要はある。

◎事務局

市も財団の組織のことについてもっと勉強しないといけない。担い手について、専従で事務をする人が重要であろうと考えている。

財団には、理事や評議員が必要になるが、想定しているのは、評議員についてはこのコアメンバー会議の相談役となっている方、大学教授や商工会議所の会頭など地域の中で一定

の役割を担っている方をお願いしようと思っている。理事には、地域の中で中間支援的な活動をしている方になっていただきたいと思っている。

- ・事務局職員の必要性はわかる。ただ、理事と評議員は、設立から関わっているコアメンバーから選ばないと、事務局一任となり、事務局の力が強くなってしまう危険性がある。

代表者がしっかりした上での事務局があり、協力しようという意識の中で話し合いを重ねてきたメンバーが監視できる体制にないと、その組織は危ない。評議員には有識者を入れないといけないのかもしれないが、ここにいるメンバーも入るべき。入らないのであればこのような話をする必要もないのではないかな。

- ・財団ありきで話が進んでいるが、もともと何がしたいかを再度整理しないと方法論になってしまう。自分も NPO をやっていて、同じメンバーでも月日経つと支援の方法などの考え方も少しずつ変わってくる。その時に、私たちの団体はこういう支援を求めていくというすり合わせを都度丁寧にやっていかないと、バラバラの団体になるので、もう 1 回原点というか、毎回目的を会議のたびに貼っておくとか、そういう共通認識がとれたらいいと思う。

- ・財団のニーズがあるのか、調査も必要。

- ・財団は手段であって、目的ではない。目的は「まちを良くすること」ということだと思うが、「どうなったらまちがよくなったか」は、各人によってバラバラで、指標のようなものをみんなで考えるのがそもそも必要かと思う。指標ができれば、そのために何をしようという意識が出てきて、財団を作ろうということになるのかもしれない。

- ・公益財団法人を設立しようとしているのは、寄附者の立場に立っているところにあると思う。NPO でも寄附金控除はあるが、認定 NPO とならないといけないので、手続きが煩雑である。寄附者、受益者、中間支援者のそれぞれにとって何が一番いい方法かを考えないといけない。

◎事務局

目的や指標を次回すり合わせした上で、次の話に進めるようにしたい。

(終了)